

---

# 夏休みの秘密

浅葉りな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏休みの秘密

### 【Zコード】

Z3553C

### 【作者名】

浅葉りな

### 【あらすじ】

夏休み、高雄と一緒に、高雄の祖母のところに行くことになった優人。外海に浮かぶ小さな島で、ふたりは少しだけ、距離を縮める。ヒミツシリーズ2作目。

夏だ。

夏といえば当然、夏休み！ 夏休みといえばデート、そう相場が決まっている。高雄と恋人同士になつたばかりの俺は、とにかく浮かれていた。

だつて恋人同士になつてから、はじめての夏休みだ。海水浴とか夏祭りとかキャンプとか、イベントは田白押しなのだ。

これが浮かれずにいられようか！？

俺は断言する。これで落ち着いていられるやつは人間じゃあない！

「どうした、にやけて」

高雄が相変わらずのクールさで俺に問う。俺は高雄の腕に自分の腕をからめて、でへへ、と笑つた。

「だつてさー夏休みだぞ夏休み」

「ただの長期休暇だろ？」

「わかつてないなー。俺は高雄といつぱい一緒にいられるのが嬉しくて仕方ないんだよ！」

まったく、言わなきゃ分からぬのかこの朴念仁。ああでもそういうどこも好きだ。

「 なにを考えてるかは知らんが、俺は夏休み中はずつと母方の祖母の家だぞ？」

一瞬、頭の中が真っ白になつた。

そんなんのありかよー！

高雄の母方の祖母の家、つていうのは、日に小さな連絡船が二度しか行かないような離島なのだ。そんなところに行かれたら、全然一緒にいられないじやないか！

「 しようがないだろう。毎年恒例だ」

そう言われてみれば、毎年、高雄、いなかつたような。なんで忘れてたんだ俺！ ああ～間抜けだ。

「なんとかならないのかよ高雄～」

「手伝いする、と言つんだつたら連れて行つてやらないでもないが

「やるやるー なんでもやるー で、俺なにしたらいいの?」

「力仕事」

そんなわけで俺は、高雄と一緒に二時間連絡船に揺られて島に渡つた。

さすが田舎、空が本当に青い。水平線の辺りには入道雲があつて、空も海もすこく青くて。

太陽のせいで皮膚がちりちりしたけど、そんなの全然気にならなかつた。

どうしてこんなに海つて青いんだろう。水道の水はどれだけあっても透明なままなのに。

「そんなことも知らないのか?」

「どうも思つていたことが声に出ていたらしい。

「どーせ俺はおばかだよつ

ふくれてみせる。

高雄は困つたような顔で、俺の頭をくしゃりとなでた。

「で、さあ。高雄のばーちゃん、どこにいるんだよ

あたりを見回してみるけど、誰もいない。降りたのだつて俺たちふたりだけだつた。

他にはいろいろ入つているらしい段ボールがひとつ。それくらいだ。

「俺が案内してやるから安心しろ。優人は言われた通りにそれを運べばいい

「着いた早々? まだ自分の荷物だつて運んでないのに~

「おまえの荷物は持つてやるから。そういう約束だろつ

そう言わると弱い。無理を言つてついてきたのは俺なのだ。

でも、もうちょっとくらい優しくたつていいと思う。ぬいぐるみに盗聴機を仕掛けるくらい好きなんだつたら、キスとかいろいろじ

てくれたつてよさやうなものだけビ、高雄は俺を抱き締めてくれたことすらないのだ。

「この夏、大人になつてやるーー といつのが俺の密かな目標だつたりする。

俺は仕方なく箱を抱えた。想像よりすこし重たくて、よろめく。なにも言わずに高雄が支えてくれた。

愛なんだろーか、これつて。ちょっとだけドキドキする。高雄と密着してるとこが熱い のは夏だからか。

でも高雄はすぐに俺から離れた。鞄をふたつ持つて、先に立つて歩き出した。

俺はその後をひょこひょこしていく。

思つたほどには遠くなくて、田的池にはすぐ着いた。

そこはまるで、まんがに出てくる駄菓子屋だつた。古びた木造の平屋で、店先には今はほとんど見掛けないような安価な駄菓子とか、それとは不釣り合いな生活雑貨が並べられている。

「おい、これはどーするんだよ!」

俺を置いてすたすた上がり込む高雄に向かつて叫ぶ。

「その辺に置いとけ」

持つていかれたりしないのかなと思つたけど、置いていかれたくないから、日陰に箱を置いて高雄のあとを追いかける。

「お久し振りです」

きつちり直角に頭を下げる高雄の背中にぶつかつて、俺はうめいた。

脇からのぞくと、しわくぢやで、でも背筋のしゃんとした和服姿のおばあさんが、レジの前でざぶとんに正座していた。

「よく来たの。荷物は持つてきたかい」

話し方もきちんとしている。俺はぶんぶん首を振った。

「そこに置いてきました。他にやることはありますか?」

「とりあえず部屋に案内しようつづいて」「

高雄のばあちゃんは言つて、立ち上がつた。

店に人がいなくなつちゃうけどいいのかな、と思つたけど、気にしないことにする。さつと平氣なんだろう。

レジの「しづの引き戸」をぐぐると、たぶん居間なんだろう部屋に出た。小さなテーブルがあつて、その上には小さい蚊帳みたいな力バーが置いてある。中にあるのはたぶん、おにぎりだらつ。

天井からは黄色い紙がびらびらぶらさがつていて、部屋の端には白い煙をたなびかせる蚊取り線香があった。

教科書とかまんがでしか見ないような、典型的な日本の家だつた。四方にあるふすまのうち、右手のふすまを開けて高雄のばーちゃんは歩いていく。

ふすまの向こうにあつたのは歩くといやな音を立てる板張りの廊下だつた。高雄のばーちゃんは短い廊下のつきあたりにある引き戸を開けた。

「ふたり一緒によかつたかい」

振り向いて、高雄のばーちゃんが言つ。

部屋はそんなに広くないけど、かえつてそれが好都合だ。高雄とべたべたする口実になる。

「あたしの部屋から近いと氣を遣うだらうからね、そつくるといじしか部屋がないんだよ」

「十分です。お世話になります」

高雄はまた、深々と頭を下げた。

呆然としている俺の脇腹に、高雄の肘が入つた。

「でつ」

うめきつゝも、俺はお世話になりますと頭を下げた。

「じゃ、早速働いてもらおうかね」「はやつ。

そつは思つたけど、口に出すとなにを言われるかわからないので、黙つておいた。

「畠の草取りの時期でね。助かるよ」

高雄のばーちゃんはそつして、出ていった。

「ああ～海水浴～」

うめいた俺の額を、高雄がぴしゃりと打つ。

「こんな時間に行つたら、日焼けでひどいことになるぞ」

「わかつてゐけどそー、そこを押してやるのがいいんだよ

「草取りが終わつたらいくらでもつきあつてやる」

「ほんとだな？ 約束だからなー！」

そうとなつたらとつと片付けて海だ海！

気合いで入れて行つた烟は、拍子抜けするくらい小さかつた。

これのどこが力仕事なんだろう。家庭菜園とそう変わらない、いやむしろそれより小さいかもしけないくらいの烟なのに。

「腰が悪いんだ」

ぱつりと高雄が言つた。

なんだか、すくなく優しい顔してて、不覚にもほろつときてしまつた。

変人だし変態だしあんまり優しくないけど、やっぱ好きだぜ高雄  
！！

そうとなつたらいとこ見せてやらなきやだ。俺は腕まくりした。  
見ると、高雄は黙々と草取りをはじめている。俺もその横にしゃがんだ。

土にしつかり根っこをはつてゐる雑草を、できるだけ根っこを残さ  
ないよう抜く。雑草は持たされたバケツにいれた。こうしないと、  
地面にまた根付いちやうだそだ。

でも、単純な作業ではあるけど、意外とつらい。太陽はじりじり  
照りつけるし、潮氣を含んだ風が皮膚にまとわりついてくる。無理  
な体勢だから、腿も痛くなつてくる。

高雄を見ると、全然なんでもないみたいに、俺の倍くらいの面積  
を片付けてた。

「疲れたんなら日陰で休め」

小さく高雄が言つた。「いいよ。これくらいビーチでこないか

「ら

「氣分悪くなつたりしたらすぐ言えよ」  
「おひ

そうしてひとりきり草を取り終えた頃には俺はすっかり筋肉痛になつていた。

高雄にふとんを敷いてもらつて横になつたけど、体の節々がギシギシ痛んだ。

「海水浴に行くんじゃなかつたのか？」

「高雄の意地悪へ行けるわけないだろ～」

「うらみがましく高雄をにらむ。高雄は涼しい顔をしている。

俺がむくれると、高雄が俺の頭をなでてくれた。

そうしてうつとつ目を閉じたところに、唐突にふとんをめくられた。

うわーそんな大胆な！

目を開けたら高雄が俺にまたがりつとしていた。

「うつぶせになれ

「いや俺、最初は顔が見えたほつが！」

「なにを考えてる。ただのマッサージだ

「ああ～」

「むしょうに情けない。反省。

うつぶせになると、高雄が遠慮なしに乗つてきた。背中に感触が

。もう、妄想スパイアルだ。

肩とか腰とか背中とか、遠慮なしにぐいぐいもまれる。痛いんだけどちよつと気持ちイイ。

「ん～キク～

ああ我ながらジジくさい。

でも、高雄の手が気持ちイイのは否定できない事実で。

「どうしてこんなにうまこんだよー。つまざぎ

「毎年やつてるからな

「なに、高雄つてば毎年違う恋人がいてただれた交際を！？」

叫んだとこりでこびんをくらつ。

「何年片想いしてたと思つてるんだ

むぎゅ。

高雄がたれはんだみたいに、俺に重なつてぐる。

「ひつひつのはすゞくどきどきする。

普段からよくふぞけあつてて、スキンシップの多い俺たちだけど、なんでもないのにこうこうことになるどきどきが止まらなくなる。メカマニアの変人で、言葉遣いも変で男前なのに女子子に全然モテなくて、友達らしい友達なんて俺くらいしかいなくて。

そんな高雄だから、艶っぽいことと結びつかなくて、余計にそんなことを思うのかもしれない。

「夕飯ができたよ」

ムードにひたつているときに、急に声が降つてきた。顔を上げると、高雄のばーちゃんが立つていた。

俺はなんとなく、じきまきしてしまつ。

なにか言われるかと思つたけど、そんなこともなく、高雄のばーちゃんは行つてしまつた。

「変に思わなかつたのかな？」

「寝技にしか見えないだろ？」「これは

「でもふとの上でくんづぼぐれつ……いやらしこ

「いやらしいのはおまえの頭だ」

あう。あんまり叩かれたら馬鹿になる。

「でもやー、毎年つて、誰にだよ

「祖母」

「あ、そつか

「ああ。だからあとで実験台になるよつ

「な、なんのだよう」

また怪しいメカを作つたんだろうか。

高雄のメカは性能はいいけど、いかんせん使い方がエキセントリ

ツクだ。

俺へのプレゼントに仕掛けるための盗聴機とか、居場所を見失わないための発信機とか。

今日の場合にはマッサージ機？ いやもしかしたら妖しいものかも…なにせ高雄だ。

なにをされるんだろう。どきどきしながら食べた夕食は味がなかつた なんてことはなく、普段よりずっとおいしかった。

亀の甲より年の功？

部屋に戻ると高雄は正座していた。なんか本氣オーラがひしひしと…

「そこに座れ」

「は、はい」

命じられると逆らえない。俺はふらふら、ふとんの上で正座した。高雄が俺の背後にまわる。ああ、なにをされるんだろう。どきどきする。

とん、と肩を叩かれた。リズミカルに、両肩を叩かれる。俺の肩なんか叩いてどうするんだろ。首を傾げていると高雄が俺の前に座つた。それなのに肩は叩かれ続ける。なんで？

「どうだ？」

「え…うん、気持ちいいかなー」

反射的に答える。高雄は満足げにうなずいた。

首だけ曲げてうしろを見ると、間延びしたけん玉のけんみみたいなものが立つていて、その両端についたロボットアームみたいなものが俺の肩を叩いていた。

「なんなんだ、これ

「肩叩き機だ」

「そりや見ればわかるつで。そーじゃなくてさー、別にこんなのは使わなくても、直に叩けばいいじゃん」

「俺がいなくちゃならないんじゃ意味がないんだ」

「なんで？」

「この島から出たくないらしい」

優しい田をして高雄が言つた。でも高雄の田は俺を見てない。たぶん、高雄の視線の先にいるのは高雄のばーちゃんだ。ちょっと悔しい。高雄が優しいのは理解出来るけど、たとえ肉親相手だってそんな田するなよって思つ。

「高雄」

膝でずりずり歩いて高雄に抱き付く。そのとき間違つて背後の肩叩き機に足をひっかけたけど、気にしない。

「暑苦しい」

言いながらも高雄はにまにましている。えーい、このオヤジめ。でもまあそんなところも好きだ。思いつきりオヤジな感じに俺を翻弄してくれーい！

「ん…？」

でも高雄の口からこぼれたのは俺が期待してたみたいな言葉じやなくつて。

視線の先は俺の背後　肩叩き機に注がれてる。

見ると、肩叩き機は怪しげな煙を上げてスパークしていた。

これは。

もしかして、あの、例のパターン？

ぼす、とロボットアームがふとんにメリ込んだ。どう見ても畳にまで貫通してるんだけど。これで叩かれたらすげることになつそうなんですねー！

「暴走してる？」

「ああ、してるな」

「してるなじやなーい！」

冷静にしてる場合がよっ。

そうして俺がわたわたしてる間に、肩叩き機はふとんを攻撃し続けている。

「な、なんとかしろー！」

高雄はふむ、とうなずいて、俺を下がらせた。

危なげもなく肩叩き機の背後にまわって、伸びているコードを引つ張る。ぶつ、と音がして、肩叩き機の動きが止まる。

まさか有線だったとは…。

「まだ改良の余地ありだな」

「こんな危ないモン使つてられるかよー」

「そつか…」

なんて、高雄が本当に落ち込んだ顔なんかするから、悪くもないのにじきまがります。

「一年分叩いてやつたらいいじゃん、夏の間に」

「本当なら、いつも一緒にいてやれればいいんだけどな」

「しょーがないじゃん。それに俺、高雄がいなかつたら寂しいって

「そつか」

「そーだよ。気がおかしくなりそつなくらい寂しいって

高雄がむぎゅっと抱きついてくる。

どうせだったら、ここで、ドラマみたいにキスでもしてくれればつ。そうすれば、こんなにじきじきしないですむの!。

「元気になつた?」

照れ隠しにたずねると、高雄は俺のでこに軽くちゅ、と口づけた。

ああつ、ファーストキスがでこちゅーなんてつ。浮かばれなさす

あわ。

俺が望んでたのはもつと大人の一。こんな子供だましとは断じて違うのに~!

でも、まあ、いいかなとも思つ。高雄はなんだか幸せそつだし。  
それで俺は満足だ。

「よし高雄、肩叩き券つくれりつー

「肩叩き券、つて…」

「いーじゃん孫つぽくて。つこでにマッサージ券もつくれーぜー」

高雄、あれだけマッサージつまいんだし。絶対喜ばれる、と思つ。  
俺が肩に手を置くと、高雄ははにかみながら笑つた。

こつもの尊大な高雄もいけど、いつも高雄もことと思つ。

ああ、やつぱり全部好きだー！

愛があふれちやつた俺は高雄にいつそつ強く抱き付いた。

にまにましてこる高雄の一部がオヤジっぽい反応をしていったのは、まあ、気付かなかつたことにしといてやつた。

とりあえず、そつやつて作った肩叩き券を渡すと、高雄のばーちゃんはふん、と鼻を鳴らした。まあ嬉しかつたんだろうと思つておくことにした。

そのときにつこでつてことでお手伝い券も渡したんだけど、それはすぐに後悔することになった。畠仕事から品出しから布団の上げ下ろしから、とにかく力を使う仕事を任されるようになつたのだ。おかげで高雄といぢやつく暇もなくけくちく不満がたまりはじめていた。

でもそんなんある日、高雄のばーちゃんは朝になつて、毎になつても起き出してこなかつた。

最初は俺も高雄も気付かなかつたんだけど、前の晩に言いつけられた仕事を全部こなしたあとで、他になにかやることはないか聞きにいつてはじめて気付いた。

「…具合でも悪い？」

聞いても答えない。

でも、別に苦しそうな様子もなくて

最悪の想像が頭をかすめる。頭を振つて、すぐにそれを追い出す。

「どうした？」

俺がいつまでも戻つてこないのを不審に思つたらしい高雄が、引き戸のかげから顔を出した。

高雄の顔を見たら泣けてきて仕方なくて、俺はただえぐえぐと不明瞭につぶやいた。

高雄はあわてたふうもなく、ばーちゃんをやせくへ撫でぶる。

しばりべすると、まるで魔法が解けたみたいに、ばちつと口を開けた。

「だ、だいじょぶ？」

思わず声が裏返る。

「ああ」

高雄のばーちゃんは短く言つて、猫を追つ払つみたいに手を振る。なんだそりや、と思つたけど、口こぼれはない。おとなしく高雄と一緒に部屋を出る。

「悪い」

「なんで高雄が謝るんだよー」

「俺の祖母だろ」

「したら、俺は高雄の恋人じゃん。つまり高雄のばーちゃんは俺のばーちゃんも同然だつて」

「変な理屈だな」

「高雄の理屈のほうが変だつて。俺ちつともわかんないし」

「それはお前が馬鹿なんだ」

「ひどいー！」

高雄をぽかぽか叩く。高雄は苦笑しつつも俺の好きにさせてくれる。

「悪いな。年なんだよ。でも認めたくないんだ」

高雄はぱつりと言つたけど、俺は無視して叩き続けた。別にそんなの、どうでもいい。

だつて俺はなんにもできないし。だつたらせめて見なかつた振りしてやるのがやさしさなんじゃないのかな。

少なくとも俺なら、へたに氣を遣われたりするよつもほつとつてほしい。

認めたくなといつて、そつこつことじやん?

「高雄を大事にしてやつとくれ」

そろそろ帰るつて頃になつて、荷造りをしてる俺のところに来て、

唐突に高雄のばーちゃんが言つた。

最初はなにを言われたのかわからなかつた。

大事について。

言われなくても大事にします。ていうか大事にされます。  
いや問題はそんなとこにはなくつて！

「お迎えがきたら、高雄がひとりになるだろ？」

「そんな」

高雄は全然ひとりじゃないのに。

ていうか、どうして俺にそんなこと聞ひついだらう。  
自分が死んだら、なんて。

俺にはそんな仮定はできない。

だつて自分が死んだらどうなるのかなんて、死んだことないから  
わかんないし。

「高雄は大事にするけど。でもそれ、言われなくともだから  
俺にはそう返すのが精一杯。

だつてほんとに、ぜんぜんわかんない。

「高雄には秘密にしどくから。もうそういうこと言わないで」  
高雄のばーちゃんはやりと笑つて、満足げにうなずいた。  
よくわからないけど、俺の答えが気にいつたらしい。

よくわからないばーちゃんだ。

でもまあいいやつて、俺も笑つた。

たまにはそういうこともあるさつてことだ。

高雄のばーちゃんが行つてから、そーいやなんで知つてるん  
だつて気付いた。

俺も高雄もばーちゃんに見えるとこじゃなんもしてないのに！  
うーん、ばーちゃんのカンおそるべし。

入れ違いに高雄が戻つてきて、俺を見て変な顔をした。

ひどいなー、俺はただ、高雄のことを考えてただけなのにつ。

抗議の意を込めて見つめていると、なんとなく、高雄は大事な人  
がいなくなつちゃつたらどうするんだろ、と思つた。

俺だつたら、きっと、泣いて泣いて泣きまくつて、涙が枯れるま

で泣いちゃうに違いないけど。

高雄が泣いてるところなんか想像がつかない。まだなじつたりして  
るつて方がしつくづくる。

高雄は、もしもばーちゃんが死んだらどうするのかな。  
俺が死んだらどうするのかな。

「どうした

「ぐるぐるしてる」

「変なやつだな」

ぎゅむ、と高雄は抱き締めてくれる。

俺が不安なのわかったのかな。

俺がどうしたらしいのかわからないでいるの、わかったのかな。  
だとしたらちょっと嬉しい。ちょっと怖い。

「また、来年もきたいな」

「そんなんにこき使われたいのか

違うよ、と内心思う。

高雄は気付くのかな。俺が違つて思つてること。  
俺がまた来たいって思つたのは、高雄のことはこんなに大事にして  
るんだぜーって高雄のばーちゃんに見せたいからだ。  
ふたりだけの秘密の成果を見せてやりたいからだ。

高雄のばーちゃんはきっと、すぐ高雄のことが大事なんじゃない  
のかな。

でも俺も負けてないんだぞー、って言いたい。すじく言いたい。  
自分が死んだら、なんてこと、言つてる暇がないくらい、見せつ  
けてやるつ。

「いいとこじやん、だつて」

海水浴なんか全然できなかつたし、毎日魚ばつかで少し飽きたけ  
ど。

潮風がべたべたしてかなり気持ち悪かつたけど。

でも、すごいことだ。

「そうか」

高雄は田を細める。

今だ、隙ありつ。

高雄の口に思い切りキスする。

「んむり」

高雄は田を白黒させる。

ふつふつふ、大成功。

思いつきりティープなのは無理でも、これくらいはいただいてやる。

「唐突なやつだな」

「やだつたのかよー」

「まさか。もう少し大胆だともつと嬉しい」

「正直すぎ」

「にしても、どうした」

「秘密」

俺とばーちゃんの秘密だから、簡単には教えてやらない。

第一、高雄を思いつきり幸せにするんだなんて教えたら、きっと笑われる。

だから絶対、教えてやらない。

夏休みには、秘密がいっぱいあるほうがいい。その方が断然、思い出に残る。

きつく抱きつぶと高雄はいつもみたいににまにまして、俺の頭をなでてきた。

暑苦しい。

でも幸せってきっと、暑苦しいものなんぢゃないかなと思つ。なにしろ俺は今、幸せいっぱいだからして。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3553c/>

---

夏休みの秘密

2010年10月8日15時53分発行